

いも ぬかたのおおきみ
紫のほへる妹 額田王をめぐって

人間環境大学
講師 花井しおり



1. 本宿駅の謎

人間環境大学の最寄り駅、名鉄本宿駅に巨大なレリーフがあるのをご存知でしょうか。本宿駅を出て東側、豊橋駅寄りのところにバス停があります。その前にあるレリーフです。そこには、本日のプリントにあげたような衣装を身に纏い、百合の花を手にした美しい女性が描かれております。そして、その女性のもとには「額田姫王」という文字が刻まれております。

私、人間環境大学に参りまして3年目に入りました。初めて本宿駅に降り立ち、本宿で「額田姫王」に出会った時、それはもうとても驚きました。と申しますのは、本宿駅にみえます「額田姫王」というのは、『万葉集』の有名な歌人、「額田王」に他ならないからです。この二つについて最初に少し申し上げておきます。この「姫王」という書き方は『日本書紀』にみえるあり方です。『万葉集』には、本日の資料の一にあげましたように、「額田王」と、「姫」がない形で載せられております。この二つの表記はともに「ぬかたのおおきみ」と読むべきもので、同一人物を表します。記し方の区別をするために、これから『日本書紀』のあり方、本宿駅のレリーフのような表記の場合は「額田姫王（ぬかたのひめおう）」、そして万葉集のように「姫」がない場合は、「額田王（ぬかたのおおきみ）」というように申し上げます。

先程の話に戻りますが、私が初めて本宿駅に降り立った時以前、私は万葉歌人額田王の勉強はしておりました。しかし、先生から額田王と本宿駅、三河との関わりについて教えて頂いたことは、ただの一度もありませんでした。そして、額田王と三河との関わりをいう論文や文献も、実は読んだことがありませんでした。そんな私が本宿駅に降り立って額田王に出会ったわけですから、その時の驚きというのはご想像頂けるかと思えます。はじめに私は3年前に人間環境大学に参りました、と申しましたが、その初出勤の日は、おそらく皆さま方にとっても、ご記憶のある日なのではないかと思えます。と申しますのは、この町を舞台としたドラマ、NHKの朝の連続テレビ小説、あの有名な『純情きらり』の始まった初日、あの日に私は初めて大学に出勤を致しまして、理事長先生に辞令を頂きました。私の初出勤の日には岡崎の町を舞台としたドラマが始まりました。そして大学の最寄り駅には、万葉歌人額田王のレリーフがあるではないですか。そこで私は自意識過剰なのでしょうか、もう気分は、世界は私の為にあると、そのようなものでした。私にとって、岡崎の町、そして本宿はパラダイスのように感じられました。そんな気持ちで心躍らせて出勤したことを、昨日のこのように覚えております。

私ごとに話が逸れてしまいましたが、実は今回この岡崎学のお話を頂きました時、正直に申し上げて最初は困ったなと思いました。と申しますのは、『万葉集』に岡崎市で

詠まれた歌、あるいは岡崎市と関わる歌というのが、すぐには思い浮かばなかったからです。しかし、思えば本宿駅のレリーフがあるではないですか。そこで今日は、万葉歌人「額田王」という人はどのような女性なのか。そして「額田王」と本宿駅はどのように結びついているのか。という二つについてお話をさせて頂こうと思います。どうぞお付き合い下さい。

2. 額田王

レリーフにみえます「額田姫王」、すなわち額田王は『万葉集』に12首の歌を残す歌人です。『万葉集』には、だいたい4,500首余りの歌が載せられています。そのうちの12首ですから額田王の歌の数というのはそれほど多くはありません。そうではありながら額田王という人は万葉集で最も有名な女流歌人だと申し上げても過言ではありません。『万葉集』の歌は、中学・高校の国語の教科書に基本的には取り上げられています。そして、教科書には額田王の歌としては、必ずプリント1の「額田王」とのところにあげました、

あかねさす ^{むらさきの}紫野行き ^{しめの}標野行き ^{のもり}野守は見ずや 君が袖振る

という歌が載せられております。この歌は、おそらく万葉集の中で10の指に入るほど有名な歌だと、言ってよいと思います。この歌はどこかで一度は読まれたことのある歌ではないでしょうか。

3. 小説のヒロインとしての「額田王」

この「あかねさす」の歌を詠んだ、額田王を主人公とする小説が、ここ何十年間の間にいくつか見られます。その中で額田王はどのように描かれているか、ということを見て参りたいと思います。はじめにあげましたのが、井上靖の『額田女王』という、新潮文庫にも入っている有名な小説です。そして2つめが黒岩重吾の『茜に燃ゆ 小説額田王』。その他にも歴史小説で有名な永井路子の『茜さす』などがあります。それらで額田王がどのように描かれるかと言いますと、例えば1番目にあげました井上靖の『額田女王』では、額田王のことを、「あれだけ美しい女は見たことがない。間人皇后も美しいが、さっきのあの女(花井注 額田王のこと)が随って来るのを見ると、後の美しさなど問題ではない」と言われております。2番目にあげた黒岩重吾の『茜に燃ゆ』では、「額田王、そなたは今、男子たちの噂的になっておる、肌は雪のようだし、絹のような光沢をおびている、それに容貌は眩しいほど美しい」とあります。また3番目にあげたのは少女漫画です。このように額田王は、少女漫画にも描かれる存在です。少女漫画『天上の虹』の中で額田王は「あえて危険なことをしたくなる それほど君は美しい」と言われてもおります。これらの現代小説からみえる、額田王像というのは、「美しき額田王」ということになろうかと思えます。このように見て参りますと、額田王という歌人は本宿駅と是非関わりを持って欲しい、と願われる存在です。これから資料をもとに、そんな額田王像に迫って参りたいと思います。

4. 額田姫王（『日本書紀』）

はじめに申しましたように、本宿駅のレリーフの「額田姫王」という名前は、日本の正史、日本の正しい歴史を記そうとした書物『日本書紀』にたった一度だけその名前を表します。『日本書紀』には、「天皇、初め鏡王の女額田姫王^{めと}を娶りて、十市皇女^{とちひめみこ}を生む。」というふうにございます。天皇とありますが、これは天武天皇二年の話ですから、天武天皇のことです。この短い一文は、額田王に関わる大切なことを3つ教えてくれます。その3つと言いますのは、プリントの次にあげました から です。1つめは額田王は「鏡王」という人の娘であること。2つめは額田王という人は「姫王」というふうに言われる身分であること。そして3つめは、額田王という人は天武天皇が初めに娶った女性であり、そして天武天皇とのあいだに十市皇女という女の子を産んだ存在であるということです。

この3つのうちの と について、少し説明を加えさせていただきます。プリントをめくって頂きまして、地図がない方です。「王」という父親の身分というところをご覧下さい。「養老律令」と言う718年に制定されました法律書のところに、次のような記載があります。この「継嗣令」というのは、実は皇族の身分ですとか、皇族の皇位継承などについて、あるいは皇族の婚姻について述べた条項をいうところです。今で言いますところの、お后問題、皇室や天皇家のお后問題の時などに言われる、皇室典範というものにあたるようなものとお考え頂いてよいかと思えます。当時のその律令にはどのように記されているかと言いますと、

「凡そ皇の兄弟、皇子をば、皆親王と為よ。女帝の子も亦同じ 以外は並に諸王と為よ。親王より五世は、王の名得たりと雖も、皇親の限に在らず。」

「皇」は天皇のことです。天皇の兄弟ですとか、皇子、天皇の子どもをみんな親王と為よと。天皇の兄弟、そして天皇の子どもは親王という。女帝の子も亦同じく親王というと律令は規定しています。天皇が女帝の場合もこれに準ずると律令の規定に見えます。以外は並びに諸王と為よ。何々王というふうに呼びなさいと。親王より五世は、王の名得たりと雖も、皇親の限りに在らず。親王から数えて五世、この一世、二世というような数え方は、天皇の子は一世です。天皇の孫は二世と言います。今、血縁関係を何親等というような言い方をしますが、そのようなものとお考え下さい。ここから判ることは、額田王のお父さんは、「王」と記されていますから、天皇から数えて、その天皇はどの天皇か判りません。判らないけれども、ある天皇から数えて二世から五世の関係にある方であって、天皇家にどうか天皇に繋がりがあの人だということが判ります。

続きまして、「姫王」という身分についてです。養老律令では天皇との血縁関係の近さ、遠さで親王とか王というような呼び方が変わることが言われておりましたが、『日本書紀』では男女で、性別によって呼び方が異なることが説明されております。これは現在の皇室制度にも当てはまることで、例えば、秋篠宮家、紀子様のお家にはお姫様、お嬢様と弟皇子様がいらっしゃいますが、お姫様の方、真子様・佳子様は内親王様でいらっしゃいます。それに対しまして近年お生まれになられました悠仁様は悠仁親王様で

す。決して内親王様ではありません。そういった関係です。

こうしてみますと本宿駅のレリーフにあります、『日本書紀』の「額田姫王」という書き方が、女性である額田王の書き方としては正しくて、『万葉集』の「姫」がない「額田王」という書き方をされる人とは別人なのではないかというような疑問も生まれて参ります。しかし、『古事記』仁徳天皇のところを見てみると、「亦、天皇と其の弟速総別^{はやぶさわけの}王^{みこ}を以て^{なかびと}媒^まと為て、^{ままいちめ}庶妹女鳥王^{どりのみこ}を乞ひき」とあります。ここでは「庶妹」女性であるということを明言しながら、「女鳥女(姫)王」とは書かれていません。「女鳥王」というように女性であることを言わない表記がされています。ということから、古代において男女の「王」と「女王」という書き分け、この区別は緩やかだったのではないかとこのように考えられます。

これまで見て参りました、『日本書紀』の記事から判ることは、3つです。1番目は額田王は、天皇との関係は近くはないが、天皇家に連なる血筋の女性であるということ。そして2番目としては、『日本書紀』に「額田姫王」と記される女性と、『万葉集』に歌を残す万葉歌人額田王は、同じ女性だと考えてよいだろうということ。そして3番目と致しましては、天武天皇の初めの妻であって、天武天皇との間に十市皇女という女の子を産んだということ。という3つがわかりました。

ここまで『日本書紀』の記事を見てきた限りでは、美しき額田王像というものは結ばれては来ません。少し蛇足になってしまうのですが、実は、『日本書紀』は美しい女性に関しては、その美しさを讃える表現を持つようです。まず、木花開耶姫^{このはなさくやひめ}については「美人^{よきをとめ}」と表現しております。衣通郎姫^{そとほしのいらつめ}につきましては、「弟姫、容姿絶妙にして比^{たくひ}無し。その艶色、衣^{とあ}を徹^てして晃れり」とも美しく、その美しさというのは他の人と比べものにならないと。そしてその美しさというのは、その人が着ている衣を通して光る程である、などと表現しています。このようなことから、額田王はどうだったのだろうかという、ますます額田王への興味が湧いて参ります。

5. 額田王(『万葉集』)

『日本書紀』のことはまず措きまして、次に『万葉集』の歌から知られる額田王像を見て参りたいと思います。『万葉集』には「額田王」という記載が11例みえます。なお、『万葉集』には『日本書紀』や本宿駅のレリーフと同じ「額田姫王」という書き方の例はありません。

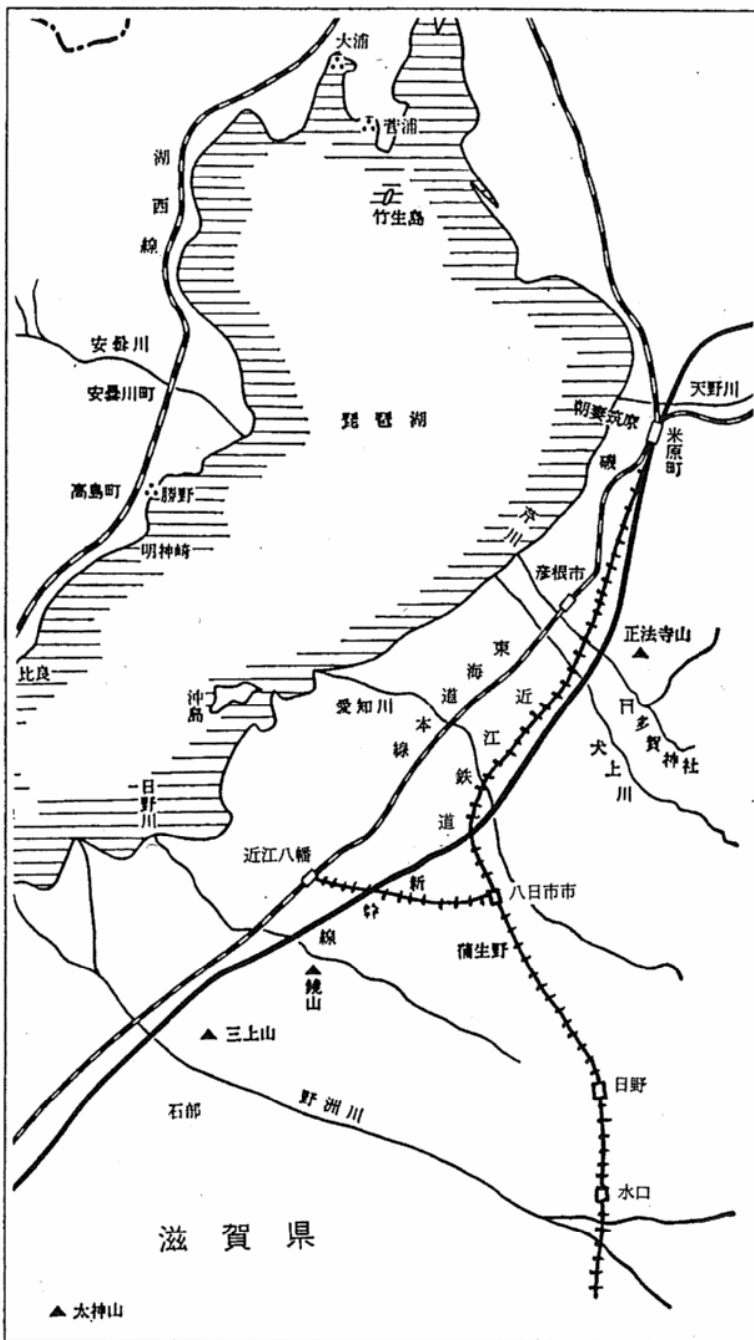
ここにあげました歌というのは、額田王を有名たらしめている、いわば教科書によく載せられている歌です。この歌を詠んで参りたいと思います。

(天智)天皇、蒲生野^{がもうの}に遊獵^{みかり}する時に、額田王の作る歌

あかねさす 紫野行き 標野行き 野守は見ずや 君が袖振る(巻一・二十)

歌の前に書いてある言葉は、「あかねさす」の歌に対する題です。題には、「天智天皇、蒲生野に遊獵する時に、額田王の作る歌」というふうにございます。その「蒲生野」というのは地名で、以下にあげました地図をご覧ください。琵琶湖を中心と致しました、滋

賀島の東側、南側を表したものです。地図の下の方を走っておりますのは、東海道本線と新幹線です。新幹線の駅で申しますと、京都と米原のちょうど中間辺りのところに在来線の近江八幡駅があります。水郷で有名な町です。そこから近江鉄道という私鉄が内陸部、三重県の方に走っておりまして、その電車で15分から20分程乗りますと、八日市という駅に出ます。その辺りがこの歌に言われる蒲生野ではないかと推測されています。



梶川信行『初期万葉をどう読むか』 翰林書房

歌の方に戻りますと、天智天皇は蒲生野で遊獵、狩りをしました。この狩りは、5月5日の宮廷の行事、公式の行事としての狩りでした。薬狩りで男性は鹿の袋角を取るといようなこと、女性は薬草を摘むということが行われたようです。その公式行事の折の額田王の歌が「あかねさす 紫野行き 標野行き 野守は見ずや 君が袖振る」という歌です。少しここで歌の解説をしておきます。歌のはじめの「あかねさす」というのは、続く「紫」にかかる枕詞です。「紫野」というのは紫草の野で、紫草は紫染めをする時のもので、根っこが漢方薬にする紫根です。これは利尿作用ですとか、強壯作用、あるいは熱冷まし、解熱というような効果があるそうです。「紫野行き」ですから、そういった紫草が生えている野を行き、「標野」というのは「標をはる」という表現が『万葉集』には多く見られるのですが、それは占有、ここは私のエリアだということを示す印をする意味です。この歌では、天皇の禁獵区、人がむやみに立ち入ることができないような野とお考え下さい。続く「野守」は野の番人です。その「標野」を守っている「野守」が見ているじゃありませんか。「君が袖振る」の「君」は、女性から男性に対する呼びかけの語。あなたが袖をお振りになるのをという歌です。万葉集の時代、袖を振るといことは決してさよならをするのではなく、愛情を表す表現だったのです。だからここで額田王は、「君が袖振る」行為を「野守」が見るのをはばかっているわけです。

この歌にこたえる次の歌が『万葉集』には続けて載せられています。次の歌の題には「皇太子の答ふる御歌」とございます。この皇太子というのは即位以前の大海人皇子のことです。これまで見てきた資料の中で、「天武天皇」という名前がありました。大海人皇子とは天武天皇の即位以前の呼び方で、『日本書紀』にみえましたように額田王を初めに娶った人です。大海人皇子は「あかねさす」と詠んだ額田王の歌に答えて、このように詠んでおります。

紫草むらさきの にほへる妹いもを 憎くあらば 人妻あねゆゑに 我われ恋こひめやも（巻一・二一）

「紫草のにほへる」というふうにございますが、『万葉集』における「にほふ」という動詞のほとんどは、視覚的なものを表します。目で見て受けた感覚。具体的に申しますと、赤系統に照り映えるというような意味に理解すべき例が多いのです。但し、現在のように香りや嗅覚をいう例は少ないですがあります。しかし、ここでは「紫草の にほへる」というふうに続きますから、視覚的に捉えた方がよいと思います。「紫草のように照り映えるあなたをもし憎く思うのならば、人妻であると知りながら、私は恋しく思うでしょうか」と大海人皇子は答えました。

ここで、ある疑問が生まれてきませんか。『日本書紀』の記事によりますと大海人皇子は額田王を娶っているわけです。だから自分の妻を「人妻ゆゑに 我恋ひめやも」と詠むだろうかという疑問です。そして額田王は、夫が自分に対して、袖を振る行為をどうしてはばかなければならなかったのだろうか、というような疑問が生まれてきます。実はその疑問からあることが想像されてしまいました。この蒲生野の歌が詠まれた時に、額田王は大海人皇子に「人妻ゆゑに 我恋ひめやも」と詠まれる存在だった。だから大海人皇子以外の人の妻になっていたのではないか、というような理解です。そして額田

王の方の歌にも「野守は見ずや 君が袖振る」と「野守」の目をはばかりる表現がありません。ここで、「野守」は野の番人で、この歌に詠まれる「野」は禁野、天皇の野ですから、ここでは天智天皇、この遊獵を主催した天智天皇の目が恐れられていたと考えられました。とすると、大海人皇子は、天智天皇の妻であったかもしれない額田王に愛情表現を、その天皇の領地でしてしまったというようなことになってしまいます。

6. 天智天皇と大海人皇子

ここで天智天皇と大海人皇子との関係を少し見ておきたいと思います。天智天皇と大海人皇子のふたりはお父さんもお母さんも同じ、兄と弟の関係です。父は第34代舒明天皇、母は35代の皇極天皇、そして二人の母皇極天皇は、一度天皇の位を降りましたが、再び皇位について、37代斉明天皇となりました。このふたりの子供が天智天皇であり、大海人皇子ということになります。ここで『日本書紀』の記載や蒲生野の歌のことを少し整理してみますと、額田王はまず弟の大海人皇子の初めの妻となった。これが『日本書紀』による記事です。そして蒲生野の歌の、ある理解によると蒲生野の歌が詠まれた時には大海人皇子のお兄さんの天智天皇の方の妻となっていたのではないかということです。このように理解をしますと、額田王という女性はふたりの天皇の皇子の間での恋に翻弄された女性となります。弟の大海人皇子は兄天智天皇の妻であると知りながら、額田王への思いをとめることができなかつたこととなります。だから、禁断の恋に走らせてしまう女性という額田王像が、『万葉集』が読まれてゆくなかで形成されてしまいました。

先程、控え室で本日のプリントをご覧になって人間環境大学の学長先生は、「私、この歌知っていますよ。これ不倫を詠んだ歌でしょう。」とおっしゃったのですが、まさにそういう理解は『万葉集』に記されているわけではなくて、この歌を享受するうちにできあがってしまったのです。それゆえ先程見ましたように、現代小説で額田王は美しい女性として描かれるに至ったのでしょう。

更にまた次にあげますように、『万葉集』には少し意味ありげな歌がございます。つづく「大和三山を詠む歌」というところをご覧下さい。この歌は中大兄、まさにこの三角関係のひとりです。この人が詠んだ三山の歌という歌。

香具山は ^{うねびを} 敵傍雄雄しと ^{みみなし} 耳成と ^{かみよ} 相争ひき 神代より かくにあるらし

いにしへも 然にあれこそ うつせみも 妻を 争ふらしき (巻一・一三)

この歌は、様々な理解がされています。そのうち、額田王をめぐる天智天皇と大海人皇子ということに関わりまして、ひとりの女性をふたりの男性が争うという理解をここには載せました。この歌が言っていることは、いにしへもこのような三角関係があった、だから「うつせみも」今、自分達もこのように妻を争うらしきというように、今のこの悩みの根拠をいにしへに求めるような歌を残しています。この歌もおそらく蒲生野の歌を不倫の歌と思わせることに預かっているのではないのでしょうか。

7. 額田町との関係

これまで見て参りましたように、額田王が美しい女性であろうということは、『万葉集』の享受史の中で生まれてきたものだということが判りましたが、そんな額田王と本宿の関係について続けて考えて参りたいと思います。額田王がこんなに魅力的な女性ですから、なおさら本宿とは関係があってほしいところです。古代において地名と人の名前とは、とても深い関係にありました。そうです。額田王と同じ名前を持つ額田町との関係を考えてみたいと思います。本宿駅というのは額田町への最寄り駅にあたります。

まず、出生地と名前の関係について、『日本書紀』を見ますとたとえば「甲辰に、御船、おほくのうみ大伯海おほたひめみこに到る。時に大田姫皇女、女を産む。よりにて是の女を名けて、おほくのひめみこ大伯皇女と曰ふ。」という記事があります。

大伯海と言いますのは瀬戸内牛窓の辺りをいいます。船が大伯海に着いた、到ったその頃、大田姫皇女という人が女の子を産みましたとあります。「よりにて」は、だからという意味。『日本書紀』には、だから是の女の子を名付けて大伯皇女と記されています。このことから、生まれた場所に因んで名前を付けるというような命名法があったということが、このことからわかります。

次に、居住地と名前の関係を見ていきます。『万葉集』の記事に「右、田村大嬢と坂上大嬢とは、ともにこれ右大弁大伴おおとものすくなまろ宿奈麻呂むすめ卿の女なり。卿、田村の里に居れば、号けて田村大嬢といふ。ただし、妹の坂上大嬢は、母が坂上の里に居れば、よりにて坂上大嬢といふ」とあります。

田村大嬢と坂上大嬢という女の子ふたりがあって、このふたりは大伴宿奈麻呂という人の娘であった。父親の大伴宿奈麻呂は「田村の里に居れば、なづ号けて田村大嬢といふ」だから姉嬢の方は父方の田村の里に居たので田村大嬢と名付けられた。「ただし、妹の坂上大嬢は」実はこの人、有名な大伴家持の奥さんになる人です。話が逸れましたが、この妹の方の坂上大嬢は、「母が母方の坂上の里に居れば、よりにて坂上大嬢といふ」このように居たところ、居住地に因んで名前が付けられるというような例が古代にあったことが、この例から知られます。

続いて、養育氏族と名前の関係を見ていきます。額田王は天皇家に関わるような血筋の女性ですから、おそらくは乳母に育てられたであろうと考えられます。当時皇族に関わるような人は乳母の氏族、育てられた養育氏族に関わって名前が付けられた場合が多いということが資料によって確認されています。例えば推古天皇、聖徳太子が摂政となった女帝として有名な人です。この人は即位前、ぬかたべひめみこ額田部皇女という名前でした。額田部と名付けられたのは、額田部氏に養育されたからだと考えられています。この推古天皇を養育したであろうと考えられる額田部氏の本拠地は大和国額田郡額田郷だということが判っております。ここからもうひとつ知られるのが、この氏族の名前というのも、やはりその地名、額田郷に深く関わっているということです。また、額田王の娘として『日本書紀』にあげられておりましたとをちのひめみこ十市皇女は、とをちのあがたぬしけ十市県主家で育てられた、あるいはここ出身の乳母によって育てられたのではないかと推察されています。そして、十市県主

家の本拠としたところが大和国十市御^{とをちのみあがた}県と考えられています。

ここで額田王という名前の命名の由来を考えて参りますと、額田王は天皇に連なる血筋であること、そして『万葉集』に額田王が三河国辺りで詠んだ歌が載せられていないことから考えますと、額田王が例えばこの三河の額田の郷で生まれたとか、額田郷で住まったと考えるのは少し難しいのではないかと推察されます。では、残る養育氏族についてはどうかと言いますと、推古天皇、額田部皇女は額田部氏に育てられたことによって、額田部皇女と命名されました。額田部氏というのは大和国額田郡額田郷を本拠とした氏族です。現在の万葉集研究では、同様に額田王は、大和国、現在の奈良県の額田郷を本拠とする、額田部氏に養育されたのではないかと考えられています。私もこのように習いました。

三河とのつながりに戻って考えてみますと、額田王の名前の由来に連なるかもしれない、参河国の額田郡額田郷というところが、額田王の時代に既に存したということを書き記す確実な資料を私は見つけてはいませんが、710年遷都の平城京から出土した木簡には、少し読めなくなっていますが、「参河国額田郡額田郷物」とあります。「米六斗」とあるように、おそらくお米を献上した時の荷物に付けた荷札木簡と思われるようなものに、「参河国額田郡額田郷」という記載がございます。ですから奈良時代には参河国に額田郷があったということまでは言うてよいと思います。

この話をまとめますと、額田郡額田郷の縁によって養育氏族、額田部氏、ひいては額田町との関わりを推定されたことによって、額田町への玄関口にあたります本宿駅に、額田王のレリーフが生まれたのではないかと、というふうに現在私は考えております。もしかしたらそこには美しき額田王に対する思い入れも少しあったのかもかもしれません。

振り返って、先に見ました蒲生野の歌について少しお話をさせて頂こうと思います。先程この歌を学長は不倫の歌でしょうとおっしゃったのですが、現在、万葉集研究では不倫の歌としては考えられておりません。万葉集において、この歌は恋の歌を集めたところに載せられてはおりません。公の歌を集めた部分に載せられています。そんなこともあって、この歌は天皇の妻に対する禁断の恋の思いを詠む歌ではなく、遊獵の後の宴席での余興の歌であったというように考えられております。そうするとどういう理解になるかと申しますと、夫である大海人皇子が翌年には孫を持つ年の頃であった額田王、そんな自分の妻に対して「紫草の にほへる妹」と讃え、そして自分の妻であるにも関わらず、「人妻ゆゑに 我恋ひめやも」と人妻でありながら恋をしてしまうと詠んだところに、歌の面白味を読み取るのです。この現在の理解によりますと、禁断の恋へと走らせてしまう女性像、そういった額田王像というのは消えてしまいそうですが、『万葉集』に残された歌からは才気溢れた魅力的な女性というのが浮き上がって参りますし、また孫を持つような頃になって夫に「紫草の にほへる妹」と詠まれる女性ですから、額田王の魅力は決して色あせるものではないと思います。

本日は、その額田王と額田町との関わりについて額田王という名は養育氏族、額田部氏におそらくは関わるものであって、その額田部氏の本拠地、額田郷との縁で本宿駅に額田王のレリーフが生まれたのではないかと、というようにお話をまとめさせて頂きたく存じます。本日はどうもありがとうございました。